

420 漫録（噫岡村先生（二））

〔『法学新報』第26巻4（296）号 大正5年4月1日〕

漫 録

○噫岡村先生（二）

○ 医学博士 岡村龍彦君

佐藤氏より懇なる申越ありたれば固より語るへき程の事柄  
とてあらねと唯在世の日を追懐して舎兄の日常生活に關し

少しく述へることとする

舎兄は少壯の頃より寧ろ健康なる方にて體質も可なり良く特に挙くへき程の大患に罹つたことは無かつた唯時折胃弱に悩みに感冒に犯さるる位に過ぎなかつた其の痼疾としては四十歳頃より屢々麻質斯に兼ねて神経痛に悩まされ春秋の候寒暑の変わり目には時として強劇なる神経痛に苦み起居の不自由を訴へしことかあつたれと特に体力に影響を及ぼす程では無かつた然るに数年前肺気腫の発生してより以来漸く呼吸の急迫を覚え少しく過度の運動や歩行にも心悸鼓動劇しく呼吸困難の為め時とすると普通の談話さへ障けらるる事もあるのて竟に之か為め業務を廢するの止むを得ざるに至つたのである爾来鎌倉などへ転地して静養に怠り無かつたのであつたか而かも体力は漸く衰弱の傾向を現はし兎角感冒に犯され易くなり一度犯さるときは容易に快復せずして之か為め頗る悩みもしたのであつたか注意して養生したらんには未だ憂ふへき程の事はあるましと思ひ居りしに旧臘感冒に罹りし際胃潰瘍を繼發し之か為めに不帰の客となつたのは全く意外と云はざるを得ない

舎兄は敢て養生家と云ふことは出来なかつたか去りとて別段目に立つ様な不養生を為た事も無かつた平素何れかと云へは宵つ張りの朝寝坊の方であつた之は学生時代頃よりの習慣からであつて之か為め晩年に成つても屢々不眠症を訴ふることかあつた曾て業務多忙の頃には不眠を免れん為め強ひて寢酒をさへ用ひたこともあつた併かし酒は生来好んで飲む方では無かつたし無論其量も少く漸く一合位に過ぎなかつたので殆んど酩酊する

様なことは曾て見受なかつた斯く酒を嗜まざりしも去りとて甘党に属する方でも無く酒席に交り二三杯を傾けることは決して辞さなかつたので恐く局外中立党と云ふか適當であつたらう歟食物にも亦甚しき好き嫌ひは無く特に美味を好むことも為なかつたか唯猪肉は好物であつた併し飲酒家の好んで用ゆる極めて淡泊なる下物を常に嬉んで賞味したことは寧ろ下戸党の籍を脱せるに庶幾かつた

喫煙は大大的好物であつた閑あれば指間常に巻煙草を挟み居る程て或人は晩年の肺気腫も恐らく喫煙か禍したのであつたらうと言ふて居る位である中年頃には類に葉煙草を薫らして居りしも其後は常に日本の巻煙草のみを用ゐて居つた併かし此好きな喫煙も二三年來は痼疾の為め遂に割愛せざるを得なかつたのである

運動散歩は余り好まぬ方て寧ろ室内に蟄居し書見するか然らずは唯茫然と天を仰いて雲の徂徠するのを眺め瞑想に耽けつて居つた常に謂へらく「余か心神休養には敢て他の方便を要せず唯た無心岫を出つるの雲を見れば足れり」と思ふに時折り胃弱に悩みしことあるか如き或は運動不足も其の一因であつたであらう

趣味は可なり広い方であつたか併かし皆一時的娛樂に過ぎなかつた初めは暫く凝る方であるか漸く其れか解つて来ると最早其れへ執著して深く究め様とする程の熾烈なる熱心さは有つて居らなかつたので中年以後晩年まで此裡の閑を窃んで随分と種種の娛樂に慰藉を求めたのであつたか何れも永續きは為なかつ

たし又止めるとなると全然忘れたかの如く其れを抛擲して顧み  
なかつた

横浜に居りし頃は鉄砲を携へ附近の山野を徘徊して小鳥を驚  
かしたこともあり又大弓の箭風に曉起の爽快を味つたこともあ  
つた勝負事は好きては無かつたか其れでも玉突や囲碁を知つて  
居つたので今より五六年前に二段の碁打か時たま宅へ来たこと  
もあつた

謡曲は中年頃比較的永く続いた娯楽であつたか今日は謡本す  
ら家に無いのである前号に原田氏の挙げられた鶴賀一流の俗曲  
の外に窃に又宇治派の一中とやらにも多少の興味を有つたこと  
もあつた

書画骨董か多くの閉戸先生に断はるる如く運動を余り好まな  
かつた舎兄は又一時之を鑑賞したもので殊に古画を愛断し頻に  
画論などを涉獵した時代があつた併かし之とても後年には最早  
珍物蒐集などの念更に無く絵画展覽会などへ行つて観る様なこ  
とも無かつた

雑書は何んでも好んで涉獵したか殊に科学的趣味を以て天文  
学や植物学などの本を読んだものである其他歴史及び一般文学  
に関する書類を頗る耽読したか併かし自分には何にも書いたこ  
とは無かつた又詩歌や俳句などを作つたことも全く無かつた唯  
た明治二十八年千島艦事件にて倫敦に滞在せし折恰も日清戦争  
か勃発したので頗る望郷の念に堪へずして二三の歌俳句に羈懷  
を洩らして余の許へ寄こしたことがあつた固より自己流の口吟  
で敢て他に示すへきては無いか旅の筆は書捨てとも云へは往時

の思出にもと此にしるすのである

平壤にて我軍大勝せしと聞き小西行長の古を追想して  
此あたり昔にまさる夏野哉

天皇広島に御登輦と聞きいと賢しく思ひはへりければ  
久方の天をもしろす君なれば月日もなとて照らささらめや

故郷を出て早や十といふ月を過しければ

旅衣きつ過にし月日かな十と重ねて秋は来にけり

庭園をいぢることは又舎兄の好みし所て植木屋を指図して彼  
所此所と木石を移動さしたるものである庭園は芝を栽へて広濶  
としたのか好きて樹木の陰鬱と軒を蔽ふのは嫌ひてあつた晩年  
には温室を造つて花卉を栽培し自ら書を携へて其中に入り暖き  
日光を浴ひつつ静読して居つた此温室中には今日も猶春光和煦  
の底に紅葩紫英か咲き乱れて居るか読書の人は最早長へに其影  
を見せないことになつた

○ 馬場愿治君談

私か横浜始審裁判所に赴任したときは恰も裁判所の普請中で  
太田の仮庁舎で以て岡村さんか重罪裁判の裁判長をやつて居ら  
れ其陪席をした……岡村裁判長の法廷振りは沈思瞑目して関  
係人の申立を聴取し其訊問は丁寧で綿密にして被告に頗る親切  
なる応対をせるを見て当時の「其方ハ」と云ふ糾問振りとは大  
分相違して居ることを感した

横浜の裁判所特に岡村さんの審判振りはその治罪法や訴答文例  
に依るは勿論たけれども当時一般の遣り方とは異なり頗る平民

的て当時の御役所風を脱して居つた岡村さんは短日月の留学とは言ひ乍ら能く英国裁判所の事務の取扱方を呑込まれ総てか英國風てやつて居られ殊に証拠法は先生の最も得意とせられた所なれば立証方法から争点を定むる工合など大に見るべきもので内国の裁判所間は勿論領事裁判所でも頗る注意を払いたる評判の裁判所であつた

岡村さんは温厚なる事務に熱心な緻密の人であつたか当時横浜始審裁判所判事は寺尾亨、中橋徳五郎、鈴木宗言、寺田栄、金山尚志、入江鷹之助、石井常英、高橋文之助、服部甲子造、平山銓太郎、加藤礼次郎、生沼永保などと云ふ一騎当千の豪傑揃てあつた岡村さんは司法部内では熱心なる人才登用主張者で古い人などは余り歓迎せず若手の有為の人物のみを部下に集められた而して此等の人に対しては至て放任主義で干渉箇間敷いことを為られなかつたか当時横浜裁判所の判決と云ふものは亦世上の耳目を惹いたものであつたか恐らく此等若手連の揃つて居つた結果たらうと思ふ

此等の判事の詰所と云ふものは中中振つたもので名論卓説も盛であつたか或時阿弥陀をやつて饅頭を頬張りながら怪気焰を闘はして居る所へ岡村さんに突如として見舞はれ大狼狽を極めた事かあつた其時の有様ときては想出しても噴飯に堪えない

岡村さんは当時私と同じ位のヘボ碁を打たれた一夕生沼永保君と私と岡村さんの宅に碁を打ちに行つた生沼君は昔も今に変わらぬ磊落不羈の人であるから愈々碁が始まると生沼君は所長を相手に「はあー奴さん困つたな」「こう行くと奴さん尻に帆

掛けて逃げるか」「奴さん弱いな」杯と盛んに奴さんを連発するか岡村さんは流石豪傑連の相手に慣れて居らるるにや格別悪い顔もせられないか同行の私は生沼君の奴さんか出る度毎にひやひやして全く冷汗腋を沾すと云ふ次第で困つたことかあつた

岡村さんは朝寝はやつた様かか勤勉であつて我我を遇するや寛洪で小言などを云はれたことは無かつたか唯た服部君に至ては怪しかる場所に入出して于時酔眼朦朧として著流しの儘役所に出て来り随分乱暴なことを行つたため此人だけは酷く叱責された事かあつた様か

ウム此様な人人か集て居つて學術上の研究会でも無かつたかと………左様、例の「ノルマントン」号事件の裁判か領事裁判所にあつた此時向ふを張て若しも詰らぬ裁判をしたならば反対意見を天下に公表しよう云ふので岡村さんか筆頭で研究会を始めた事かあつた又横浜の裁判所に「マーデン」と云ふ人か居つたので英語の研究会もやつた乍併所長始め毎週中央、明治、法政杯へ皆夫れ夫れ講義に出掛け横浜にも大塚成吉君等の経営に係る法律学校か在て此所へも教えに行くので此方に追はれて研究会は永続しなかつた

私も其後東京、浦和、広島杯に転任し岡村さんも判事を辞して弁護士と為られ私か今度東京に帰た時には岡村さんは弁護士をも廢められた後であつたか中央大学の学長をして居られたのて時時會ふたか肺氣腫と云ふ持病のあるに拘はらず中の元氣にて色艶も良く今頃亡くなられ様とは思はなかつた岡村さんは

頗る円満の人であつたか沈毅とでもいほうか何所かに強い自信力があり卓越した人であつた私の知遇を得た人て曩には菊池博士を喪ひ今亦岡村博士逝かる学識深遠なる老法曹の漸く凋落せらるるは誠に痛惜に堪えない次第である

○ 法学博士 男爵 穂積陳重君

○岡村君は明治三年以来の親友でありまして今殆んど五十年の旧友を喪ひましたのは私に取りましては非常の悲哀と失望を感じる訳なのであります殊に明治七年に旧開成学校に於て始めて法律学科を設けられて其初期の法学生となりました同級生は殆んど皆凋落して君の死亡によつて今は同級生の中に僅に中山寛六郎君と私だけが残るやうになつて心細く寂しく感ずる次第であります

○私か初めて岡村君を知りましたのは前申す如く明治三年てありまして同年に太政官か布告を出して全国より大学南校に貢進生を出さしめました夫れは十六歳以上二十歳以下の学生を選抜して大藩よりは三人、中藩よりは二人、小藩よりは各一人宛を各藩の費用を以て大学南校に入学せしめ洋学を修めしむると云ふことを令したのであります当時岡村君は鶴舞藩の貢進生となつて大学南校に入られたのであります君は貢進生中の最少年者即ち私と同年で当時十六歳であつたから初めより殊に心安かつた乍併君の志望性格と私の性格志望とは大に異つた所があつて君は青年時代は豪傑の風あり常に大なる抱負を持つて居つて當時の様子で見ると中中野心の多い大政治家にでもなるかと思ふ

たのであります居常青年ながらも世界の大勢或は国家の政治等を論議することを好み殊にナポレオンを崇拜し当時書肆で得らるべき伝記等は悉く之を蒐め熟読暗記して之を我我に話すのを楽しんで居つた又君は熱心なる蝦夷開拓論者て即ち今の北海道であるか此北海道に関する書物も集めて常に之を研究して居つた故に君は当時奈翁通、北海道通を以て儕輩に知られて居つた我我は或は君を呼ぶに岡村ナポレオン或は岡村北海などと戯れに云ふて居つた位であつた………怪しむこと勿れ当時十六七歳の青年にして斯くの如き言論行動のあつたことを當時は維新の初めてあつて三十歳時代の人か天下の政治を執つて居た時代であるからして当時の十六七歳の青年は現時の二十四五歳の学生と同じ位な言動挙動等かあつたのである

○明治七年に現今の帝国大学の前身なる開成学校に於て初めて英吉利法学科を設けられた君は其初年の法学生であつた当時の法学生であつた者は鳩山和夫、小村寿太郎、斎藤修一郎、菊池武夫、岡村輝彦、向阪兌、中山寛六郎、野村鈇吉及び穂積陳重の九人でありました岡村は私と共に中位に居つて鳩山和夫か優秀群を抜いて常に首席を占めて居て他に鼎の軽重を問ふ者かない位であつた、小村寿太郎は沈毅深慮かあつて全級の仰く所となつて同輩か彼を称して小村参議と云つた当時の参議は今の内閣大臣に該るのであるから此称かあつたのである斎藤修一郎は慧敏才略に富んで居て級中の張子房の名かあつた菊池武夫は級中の老熟者てあつて思慮周密事あるに当ては必ず君の裁断を仰く位の信望かあつた、その中にありて岡村は独り放豪不羈てあ

つて校内又は級中の事の如きは之を瑣事として同級者の為すに任せて敢て顧みずと云ふ風であつた

○明治九年選まれて私等と共に英国に留学した際に於ても尚ほ其初めに於ては磊落不羈放豪の風があつて私等は必ず後年帰朝の後は政界に風雲を叱咤して雄飛するの人となるであらうと思ふて居た例へは英国留学中君は頻りに「メンドイズム」と云ふことを唱へて居た君は常に言ふに「余はメンドイズムの哲学者である」とそれは「メンドイズム」と云ふのは面倒主義と云ふことと何でもアー面倒臭い打遣つて置けと云ふ主義なので換言すれば瑣事に拘はらずと云ふ主義である現に君は何でも「アー面倒た」と云つて打遣つて置き「良いやうにして呉れ給へ」と云つて人に任して置く細事小節に拘はらざるを以て大に得得として居た当時英国はビーコンスフィールド内閣全盛のときであつて露土戦争は我我の在学中に起つた岡村君は斯くの如き事件には非常に熱心であつて熱狂的の土耳其最負であつた反露西亜党であつた此戦争が始まると彼の「ヘツツ」と称する土耳其人の被ふる赤帽を被て倫敦の町を横行闊歩して非露西亜的の示威運動や土耳其声援の集会等には何時も此面倒哲学者は率先して野次的に馳せ加はつたラスマン、パシアーカブレヴナーの要塞を死守し力竭きて遂に露軍の為に捕はれたときの君の落胆は一通りではなかつたビーコンスフィールドか伯林会議に於て露西亜をして英国の主張に従はしめて倫敦に帰著したときの君の喜びは亦今尚ほ私の眼に残つて居るやうである

○斯くの如き野心的青年、斯くの如き放豪的壮士、斯の如き放

任的豪傑か英国留学の後半に於て俄然豹変して思慮周密小心事に当るの人となり斯くの如き面倒主義論者か刻苦精勵、一瑣事と雖も疎にさせる勤勉の人となつたと云ふのは私に取つては実に驚くべく怪しむべきことであつて豹変の文字は君の英国留学中に於ける変化に当てる程適當な場所はないと思ふ位であります英国留学の初めに於ては既に述べたる如くでありましたか私と君と向阪の三人か「キングスコレージ」大学に入り次で「ミッドルテンブル」の法学院に入りて英吉利法を修め稍々法律の味ひを嘗むるに至る頃より君は俄然として面倒打遣りの主義の人より刻苦勤勉の人となつた昼の中はデ、クールシ、アトキンスなる「バリスター」の事務所に於て実務を練習し或は講堂に入り或は図書館に赴き夜は下宿屋の一室に引籠りて法律書の研究に深更まで瓦斯灯を点して居たと云ふ有様であつた留学三年の後我我は愈々卒業試験を受けることになつた「テンブル」の卒業試験には二種あつて一は「オノールス、エキザミネーション」即ち榮譽試験、一は「パツス、エキザミネーション」即ち及第試験である前者は後者に比して試験の科目も多く程度も高いのである故に英国人でも特に優秀なる学力があつて通常卒業試験以上の困難なる試験に應ずるの自信ある者の外は受けないのを常として居る岡村君は特に自ら進んで此の困難なる「オノールス、エキザミネーション」の候補者として立つたのである私は通常試験を受けやうと思つて共に準備をして居つた際或日薄暮岡村君の寓して居る下宿屋の婆さんか色を青くして飛んで来た同君に異常あるから直ぐ来て呉れと云ふて頗る周章

狼狽の様子であつた私も取る物も取り敢へず右の婆さんと同行して途途如何なることであるかと聞くと岡村君はその頃試験準備の爲めに非常に勉強をして夜寝床に入るにも殆んど衣を解かずと云ふ有様であつた其日も薄暮に及んで皆灯火を点ほすのに独り君の室のみ灯火を点ほされず其主婦か怪んで行つて見ると君は平常の如く書物を開いて之を凝視して居る依て何故に灯火を点せぬかと尋ねて見ても其答かない耳か聞えぬやうである又振り向いても見ない驚いて前に廻つて正面から話しかけても唯書物をジイツと視て居るばかりで格別動きもしない驚いて瓦斯を点して見ると色か真蒼なので吃驚して呼びに来たと云ふ話してある私も驚いて自分は直ちに其寓所に走つて行くから近いお医者を呼んで来いと婆さんに言ふて独りて君の寓所へ急き室へ這入つて見ると老婆の云ふか如く本を見て居る大きな声をして岡村どうしたのかと呼び掛けて見ても振り返らない近寄りて背を叩き身体を揺りてドウシタ、ドウシタと言つて顔を覗き込むと僅かに私の顔を見てウーツと云ふ返辞はしたか其他の答はない私も実に驚いて途方に暮れて居る内に医者か来て薬を与へたり皆か寄つて寝衣に著換へさして「ベッド」の中に入れた医者と言ふには過度の勉強、睡眠不足等より強烈なる神経衰弱を起して今は脳貧血状態に陥て居るのであると云ふことであつた其後久しく病床にあり後海岸等に行つて余程時を経て回復したのであるか前に述べた放豪、無頓著、面倒主義の人か斯くの如き勉強家に豹変したと云ふのは何が動機になつたかと云ふことは実に一の疑問である或は君は素と思慮周密なる性質を持つて居

る人であつたのに維新以後政治上、社会上の大変動の刺戟を受けて其固有の緻密性、精勤性等か圧迫を受けて潜んで居て秩序的、規律的にして精密周到なる注意を要する法律学を修むるに及んで始めて其本来固有の性質を發現して来たのではないかと私は想像する

○君は右の疾患回復し試験に及第した後は将来の方針を著する法律家たるに定めたやうであつた卒業後は主として海法、商法等の専攻に没頭して又常に法律家と交はり裁判所に入出し「シャーケツト、コート」即ち巡回裁判のあるときには常に裁判官弁護士等と共に巡回して裁判の実務を視察した

○君か帰朝の後に於ける生活の方針は前述へたる如く留学期の後半に定まつたものと思ふ其後は私は法律学校に入り君は法律世界に出て其執る所の職務を異にして居たからして昔の如く寢食を共にして日日相見ると云ふ機会はなくなつて晩年の生活の如きは詳しく之を知らざりしと雖も我国の法律家中極めて思慮周密にして法律事務に全身を委して青年時代に於けるか如き政治的野心の如きは其痕跡たも残さなかつたように見えるのである君は放豪なる政治的野心家として英国に赴き思慮周密、用意周到、学識深遠なる精勤者として我国に帰つた者である

○其昔は学窓に机を並へて書を読み或は舟を同うして外国に渡航し或は手を携へて倫敦の公園に散歩した四十余年の旧友に先き立つて逝かれ後に残つた生存者の一人として君の往事を語る誠に無量の感慨に堪えぬ次第である